【ポスター発表】

小・中学校教師のボランティア活動の理解が教え子に及ぼす影響について
－大学生の理解を通して－

○　金城大学社会福祉学部　　岡村　綾子（３４４６）

〔キーワード〕ボランティア活動、奉仕活動、理解

１．研 究 目 的

文部省が 1998 年 4 月に告示した教育改革プログラムのなかに「ボランティア活動の促進」を図るための課題として、「学校における『ボランティア教育』の充実」を掲げた。また、教育改革国民会議が打ち出した「奉仕活動を全員が行うようにする」との提案をうけ、2001 年に学校教育法を改正し、「ボランティア活動など奉仕体験活動の重視」が盛り込まれた。この理念・方向性に関わる問題として、なぜ「社会活動」や「市民活動」ではなく「奉仕活動」なのかという指摘や「授業の一環として半ば強制された『奉仕活動』は、現在、地道な努力のなかでようやく育ちつつあるボランティア活動の思想とは相容れないものがあり、ボランティア活動の発展を阻害しかねない危惧がある」との指摘もある。そのため、児童･生徒たちにボランティア活動を通して理解させることと、その意図を明確にすることは難しく、児童や生徒の理解は実際に指導に当たる教師の理解の仕方によって異なる。この点については、教師のボランティア活動の経験や教師のボランティア観が学校教育でのボランティア教育に影響していることが指摘されている。また、ボランティア教育において、教師の力量形成と環境醸成が問われており、教師の主体性と創造性がカギであることも指摘されている。そこで、ボランティア教育を行っている教師とボランティア教育を行っていない教師とでは、ボランティア活動の経験やボランティア観に違いがあるのではないかと考え、ボランティア活動を推進している自治体と推進していない自治体の小･中学校の教師のボランティア活動に対する理解について調査した。しかし、特に差異は認められなかった。ただ、ボランティア活動と奉仕活動は違うと答えているにも関わらず、ボランティア活動のイメージとして「奉仕活動」を挙げていた。また、授業でのボランティア活動として、「地域の清掃」や「校区のゴミ拾い」等の清掃美化活動を行っていたが、「清掃奉仕」ととらえる教師もいれば、「ボランティアを行った充実感を体験」ととらえる教師もいた。これらのことより、学校教育においてボランティア活動と奉仕活動の区別が適切でないと考えた。

以上のことから、大学生をはじめ、高校生、中学生および小学生がボランティア活動と奉仕活動の違いをどのように理解しているのかということを確かめる必要があると考えた。そこで、小・中学校の教師たちのボランティア活動や奉仕活動に対する理解が児童や生徒のボランティア活動の理解に影響を及ぼしているのではないかと考え、手始めに大学生を対象にボランティア活動や奉仕活動に対する理解について予備的に検討することにした。

２．研究の視点および方法

小・中学校の教師たちのボランティア活動や奉仕活動に対する理解が、児童や生徒のボ

ランティア活動の理解に影響を及ぼしているのであれば、大学生になってもその影響は残っていると考えられる。しかし、以前指摘したように大学生になってからボランティア活動を経験することで、ボランティア活動に対する理解が変化することより、大学生のボランティア活動と奉仕活動に対する理解を明らかにするために、大学入学以前と入学以後とに分けてボランティア活動の経験の有無とボランティア活動のイメージを合わせて尋ねることにした。

調査対象：A大学の福祉系学部2・3年生26人（2年生12人、3年生14人）、B大学の福祉系学部3・4年生25人（3年生12人、4年生13人）計51人を対象とした。

調査方法：上記対象者の受講している授業時に自記式質問紙法による調査を行った。

調査期間：平成23年4月中旬から下旬にかけて調査を実施した。

調査内容：①大学入学以前のボランティア活動経験の有無とボランティア活動のイメージ、②大学入学以後のボランティア活動経験の有無とボランティア活動のイメージ、③小・中・高等学校教育におけるボランティア活動の扱われ方、④ボランティア活動と奉仕活動の違いの4点を調査内容とした。

３．倫理的配慮

調査対象者には、研究の趣旨と内容、得られたデータは研究目的以外には使用しないことについてあらかじめ説明した上で調査への参加を要請し、調査への参加をもって研究協力受諾とした。また、調査結果においては検討・分析を行うにあたり個人が特定できないように配慮した。

４．研究の結果と考察

調査協力者は、福祉系学部の大学生で、2年生12人、3年生26人、4年生13人、計51人であった。その内、有効回答数は49人分であった。

小・中・高等学校におけるボランティア活動の扱われ方としては、「体験活動」を挙げている学生が最も多く、次いで「ボランティア体験」「社会体験」の順に多く、その理由としては「ボランティアを通して知る体験的な活動として、児童にとっては強制的な意味にもあるから」「ボランティアはいいものだと思うように体験させているように感じる」「教育の一環として行われるものもあるので、半強制的な体験でもよいと思うから」「良いことだから、やりましょうみたいな強制イメージが強いから」「ボランティアっていいことだって教えてはくれるけど、何のメリットがあるのかは教えてくれないし、すでに行事化されているから」等が挙げられていた。そして、ボランティア活動と奉仕活動の違いについて尋ねたところ、ボランティア活動と奉仕活動は「違いはない」と回答した学生は49人中14人で、ボランティア活動と奉仕活動を表す言葉を3つずつ選んでもらったところ、14人のうち3つとも同じ選択肢を選んだのは3人だけであった。

以上より、小・中学校の教師たちのボランティア活動や奉仕活動に対する理解が大学生の理解に影響を与えていることから、児童や生徒の理解に影響を与えていると考えられる。